

留学・研究計画書

氏 名 井土慎二	留学機関名 ブハラ大学
留学先国名 ウズベキスタン	留学期間 西暦 2007 年 6 月 ~ 2008 年 5 月
研究テーマ ウズベキスタンにおけるイラン語-チュルク語言語接触による文法化諸相の記述的研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>ウズベキスタン内で話されるタジク語の変種を記述し、タジク語とウズベク語の言語接触によって起こる文法化のプロセスを明らかにする。ウズベク語と接触するタジク語変種の記述は、ウズベキスタン内でタジク語話者人口が集中する二都市のうちの一つであるブハラで話されるタジク語を中心に行う。(印欧語のイラン語族の一つであるタジク語はウズベク語との接触で変化してきたことが知られている。ウズベキスタンのタジク語は、既に77年間ウズベキスタン領内にあり、ウズベク語の強い影響の下、タジキスタン内のタジク語とは独立に独自の変化を続けている。殊に、ブハラでのタジク語はここ3-4世代における変化が著しい。)ウズベキスタンとタジキスタンにてフィールドワークと文献・資料収集を行い、現地の研究者との連携により、データの分析を確実なものとする。論文の出版と研究発表の両方を行うが、前者を優先させる。</p> <p>言語接触と文法化は互いに関連を持たない現象としてつい近年まで別個に研究されることが多かった。特に文法化の研究では言語(変種)内の自律的变化に焦点があたってきた。しかし、ここ数年この状態に異変が見られ、両者を積極的にリンクする動きが活発化している。言語接触とそれに起因する文法化の関係はここ数年にわかに広い関心を集め始めている。</p> <p>本研究はタジク語とウズベク語の言語接触とそれによって引き起こされている文法化の研究である。この二言語はそれぞれ異なる系統、すなわち印欧語族のイラン語系とチュルク諸語に属し、本来類型論的にもかなりの差がある。これにも関わらず、ウズベク語と接触するタジク語変種では、名詞前方型関係節や膠着型格語尾等の採用を通して、典型的にウズベク語に近づいている。このような変化に伴って、たとえば「立つ」の意味を持つ動詞の助動詞化と付属語化など、両言語で全く同じである文法化の例を多く見ることができる。</p> <p>本研究が記述の主な対象とするブハラのタジク語はここ数世代の間に急速な変化を続けている。これは既存のデータが示唆するところである。この急速な変化にはもちろん政治経済的要因、ブハラが1920年代後半からウズベキスタンの一都市となったことやタジキスタンがウズベキスタンに比して政治経済的に威信が無いことも手伝ったと考えられる。しかし、本研究にとってより重要な点は、この変化には多くの文法化が含まれ、さらにそれらの多くをウズベク語との接触に帰することができる点である。</p> <p>このように、ブハラのタジク語の変化、特にここ数十年間のそれは、接触による(急速な)文法化のデータを豊富に提供する。しかしながら、その記述は半世紀以上前の1954年にソ連でなされたものが最後のものとなっている(出版は1959年(Kerimova 1959))。加えてこの記述自体「西側」で広く知られているとはいえず、記述自体も言語接触や文法化を主題にしたものではない。本研究の対象はこの未だ研究されていない言語接触に起因する文法化の事例である。</p> <p>言語接触と文法化の研究とはほとんど独立に、チュルク語とイラン語との間の言語接触は、主にチュルク言語学界で研究(主に調査と記述)への機運が著しく高まっている。本研究でおこなう記述は、必ずしも言語接触による文法化を研究対象としないチュルク言語学界においても有意義である。</p> <p>さらに、ウズベキスタンは中央アジアの要衝である。その人口の、公式には4.8%だが一説には三割前後(Folz 1996:213)を占めるウズベキスタン内のタジク語話者の言語についての知識の深化は中央アジア研究などの言語学外の分野においても意義を持つと考えられる。</p>	

成果報告書

記入日 2008年 2月 13日

氏名 井土慎二	留学先国名 ウズベキスタン	所属機関 ウズベキスタン国立ブハラ大学
研究テーマ：ウズベキスタンにおけるイラン語-チュルク言語接触による文法化		
留学期間：2007年 4月～2007年 9月		
<p>成果</p> <p>留学の成果の一部はすでに著書として出版されており、謝辞欄に松下アジアスカラシップの名を記してある：Bukharan Tajik (München: Lincom GmbH. ISBN: 9783895865060. http://linguistlist.org/pubs/books/get-book.cfm?BookID=25058)。</p> <p>個別の成果としてはブハラのタジク語の、ウズベク語とタジク語の言語接触に由来しているように見える、未知の特徴が相当数確認されたことが挙げられる。この結果としてこれまでに確認されたことのないタジク語方言内の文法化の例が採集された。また、すでに確認されている以上に広範な文法項目にウズベク語の影響がある可能性が否定できないことが明らかとなった。前者には接語の接辞化や助動詞の接辞化があるが、特に注目すべきは三人称単数の所有をあらわす接尾辞が名詞の複合標識として使われていることである。これはこれまでにまったく報告がなかった現象であり、チュルク語とイラン語の言語接触における文法化の議論に新たな文法項目を付け加えたことになる。</p> <p>文法化の例以外にも、従来ブハラのタジク語には存在するとされていた母音の長短の区別が、もはや弁別の特徴としては消滅していることが今回のフィールドワークで初めて確認された。</p> <p>また、ブハラ大学の、自身もブハラのタジク語話者である言語学者の Ne' matov 教授や、ブハラの基準ではおそらくもっとも英語ができ、自身もブハラタジク語話者である Qahramon 講師の協力を得られたことは、まさに現地に留学しなければ不可能なことだった。彼らとは帰国後も連絡をとっており、得難いインフォーマントである。このようなインフォーマントや研究者との協力の可能性を開いたこともこの留学の成果に数えることができる。</p>		

留学全体に関する感想

ウズベキスタンは「ソ連崩壊後の混乱期を脱し成長を始めた」といわれる。私はソ連崩壊から間もない時期に初めてウズベキスタンを訪れて以来、ウズベキスタンには数回の滞在経験があるが、経済成長の兆候は、特に首都においては実感できる。しかし現在でも依然として国の前途に対する悲観は支配的で専制的な政治に対する倦厭感も強いように感じられた。これはウズベキスタンに限った話ではないが、社会に腐敗は半ば公然と存在し、大学においても成績や単位までが金で買え、逆に金を出さない限り低い成績しかつけない教員の話もよく聞く。これにより、富裕層の子息は勉強をせずとも学位を得、その一方で優秀な学生でも贈賄をしない限りは自分の能力に見合った評価を得られないという事態になる。

現実に大学内での贈収賄が減る理由はあまりなく、逆に増える理由が多いように見受けられる。その第一が教員や公務員一般の給料の少なさである。教員の給料は少なく、少数派である賄賂をとらない教員は、課外の個人教授で生活費を稼ぐことで生活を成り立たせている。大学に限らず日常生活においても縁故と賄賂なしでは多くのことは円滑に進まない。

相当の元手を持ち、目端が利く人々は熱心に不動産投資などを行い、そうでないものはロシアや韓国への出稼ぎなどで商売の元手を作るなどする。ソ連が存在した時の東側諸国の人々には生活の心配がないところから来るのであろうのんびりしたところがあった。市場経済はこれを短期間で打ち消したように見える。全体的に金銭欲を奨励するような社会になってきており、奨励の度合いはソ連以降時を経るに従って強まっているという印象を受けた。

ウズベキスタンでは、市場経済は制限付きとはいえ起業家精神にあふれた若者に起業の機会を与え、富の追及を可能とした。このため、ビジネス精神を持った者にとっては環境は改善されてきているとあってよいようだ。会計、基礎的なIT技術、外国語などを教える学校は新設される一方で哲学、理論物理、理論言語学などの「金にならない」分野は衰退し続けているようだ。若者には大学生を含めて、男子は先進国への出稼ぎの機会、女子ではより豊かな国の人との結婚の機会を伺うものが少なくない。(もっとも後者はしばしば娘を近所に置いておきたいという親の希望と衝突する。)

留学の感想としては、2007年時点でのウズベキスタンの大学は金銭と関わりない用件で訪れるとかなり場違いになる場所であるという印象を持った。